

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	画津の湖 : 文苑
Author(s)	錨山人
Citation	龍南會雜誌, 75 : 66 - 67
Issue date	1899-11-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5420
Right	

旅衣たつたの里に来て見れば

猶うき秋のむしそなくなる。

軒端なる松の梢の風さへも

身にしむ秋となりにけるかな

君えるや知らずや小夜の初霜に

里はいつこも紅葉まぬると

かしまたつ旅の空にそ秋風の

吹きまぐよひは露けかりける

旅衣袖の港をうち出て

なみにうきみはかはくまもなき

吹く風に秋の木の葉の散りくれば

野路も山路もふみそかねつる

畫津の湖

錨山

人

(一)

思ひはるけき金峰の、

洋よりひろき大そらに、
夕やけ雲のうするとき。

空のかなたへ、日は落ちて、

想 碧 想 碧 碧 想 碧 想 碧 想 碧 想 碧

峯 星 峰 星 星 峯 星 峰 星 峯 峰 星

わが世まづけき暮の色
出水の里にわくなべに、
岸べにひよく牧笛の、
今消えてゆく、書津の湖。

あゝ夕暮るゝ書津のうみ、
ひとり孤舟に棹して、
思ふか、ふかきみな底に、
瘦せてうつれるおのか影。

(二)

やかて、かゝやく明星の、
光は遠く西の空ゆ、

小 菽

紅匂ふ山の端に
黄金の波を彩とりて
輝き出でぬ朝日影
荒野も清く色染めて

水に墜ち来て鐘の音の、
むかしの夢をさそふとき。

飽田の野邊に風立ちて、
葦のうら葉の鳴るさけば、
駒のいなゝき聲さむく、
堤づたひに馬子の唄。

あゝ夕闇の森の蔭、
岸の玉藻をかきわけて、
さゝわけ小舟友どなく、
空しき湖に獨して。

吉田藤輪

れく露滋き秋の野に
獨りさまよひ草分けて
行く路の邊の塚の根に
姿優美まき花一ツ